

2019年9月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、北極付近、東アジア北東部、アラスカの南海上、米国東部、ヨーロッパの西海上で正偏差、カスピ海の北東、東シベリアで負偏差となった。ロシア西部～東アジア及び北太平洋中緯度帯において、波列パターンが見られた。200hPa 風速をみると、偏西風は、カスピ海付近及び北日本付近で平年よりも強く、東アジア中部及びヨーロッパの西海上では平年の位置と比べて北寄りを流れた。海面気圧をみると、北極付近、日本付近、アラスカの南海上、カナダ東部、ヨーロッパの西海上付近で正偏差、西シベリア～ベーリング海、米国中部、グリーンランドの西で負偏差だった。850hPa 気温をみると、北極付近、東アジア北部、アラスカの南海上、米国東部、ヨーロッパの西海上で高温偏差、カスピ海の北東で低温偏差だった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、中東南部～南アジア中部、インド洋赤道域の西部、フィリピンの北東海上、太平洋中～東部の北緯15度帯で活発、南インド洋熱帯域の東部～インドネシア付近で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、インドネシア付近～アフリカを東進した。対流圏上層では、南北半球の広い範囲で高気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、中東南部付近、太平洋西～中部の北緯15度帯、北大西洋熱帯域で低気圧性循環偏差、インド洋熱帯域の東部で南北半球対の高気圧性循環偏差となっ

た。海面気圧は、赤道域では、インド洋東部～太平洋～大西洋西部、アフリカで正偏差、大西洋東部、インド洋西部で負偏差となった。南方振動指数は-1.2だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.44℃(速報値)で、1891年の統計開始以降、9月として2番目に高い値となった。9月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.67℃/100年(速報値)である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

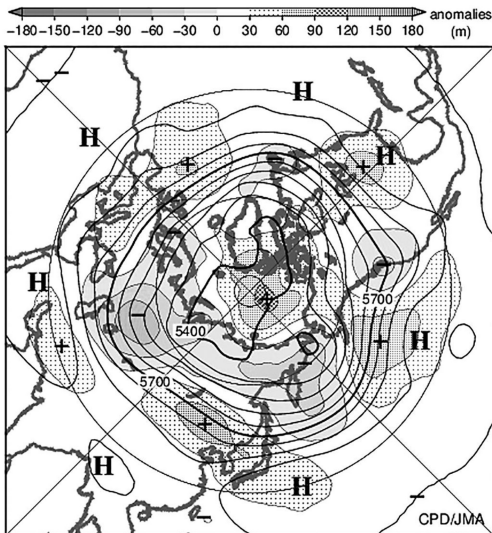
- 東日本～モンゴル、タジキスタン南西部～サウジアラビア、西アフリカ西部～中部アフリカ西部、モーリシャス～ケニア南部、米国東部～メキシコ南部、ブラジル中部及びその周辺で異常高温となった。
- インド中部～スリランカ、米国北部で異常多雨、東南アジア南西部及びその周辺、パラグアイ南部～アルゼンチン東部で異常少雨となった。

(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ

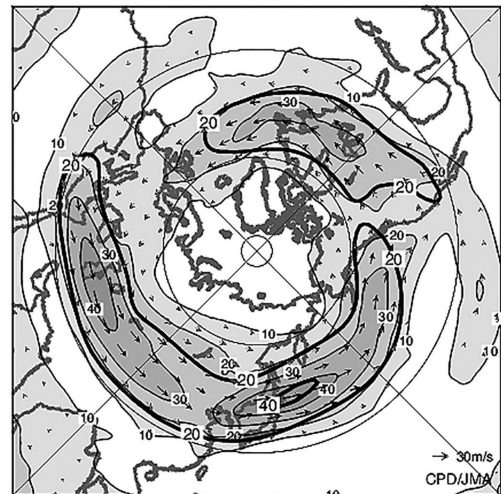
「気候系監視速報」をご覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



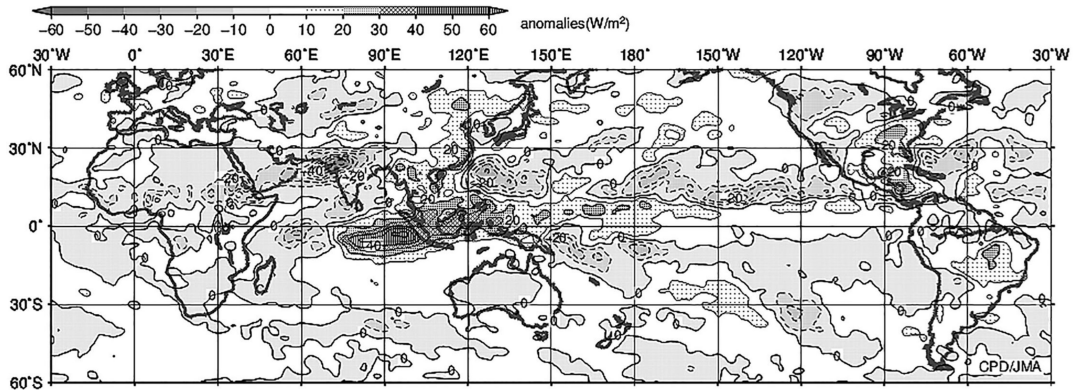
2019年9月の北半球月平均500hPa 高度及び平年偏差

等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年の平均値。



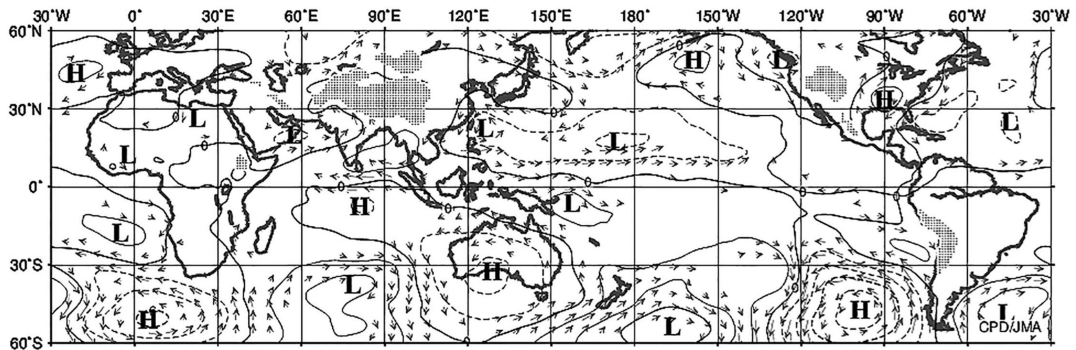
2019年9月の北半球月平均200hPa 風速及び風ベクトル

等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値線間隔は20m/s。平年値は1981～2010年の平均値。

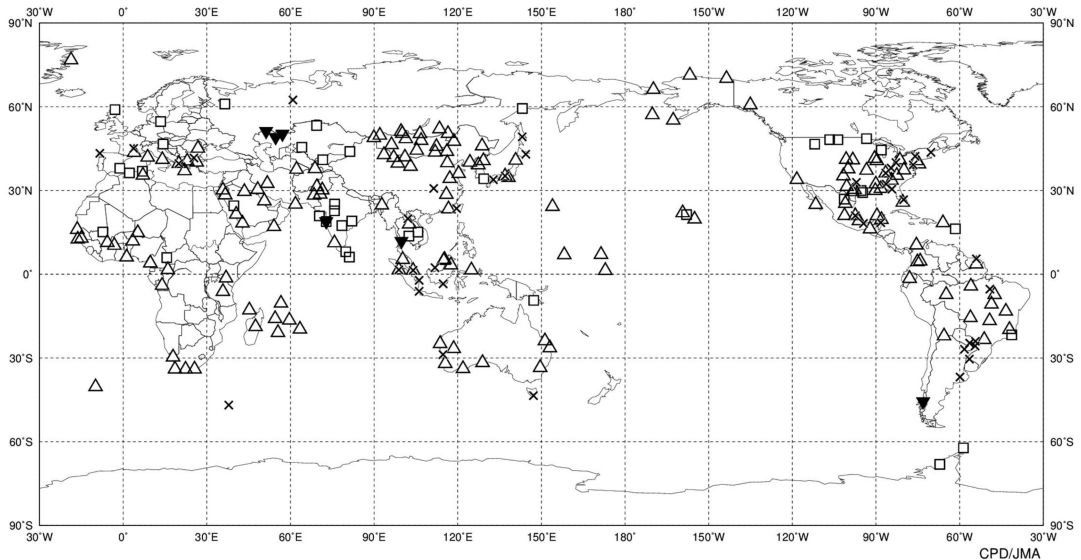


2019年9月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1981~2010年の平均値。



2019年9月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル
流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1981~2010年の平均値。



2019年9月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。